第７４回“社会を明るくする運動”
大阪府作文コンテスト
優秀作品集（ひまわり奨励賞）

左のQRコードから
特設ウェブサイトに
アクセスしてね！

小学生の部

明るい社会に向かって～私の決意～

堺市立浜寺東小学校6年
江尻　結良さん

毎日のように、暗いニュースが耳に入ってくる。作文を書くにあたり、犯罪や非行のない社会にするにはどうしたらいいのか、考えてみた。すると、お母さんが「話せる環境を作ってあげる事かな?」と言った。お母さんの子どもの頃は、サザエさん家族のように、おじいちゃんおばあちゃんがいて、親せきやみんなでご飯を囲みながら、色々な話をしていたそうだ。便利な世の中になり、電話やメールで話すことが増え、その分目を見て話す機会が減っているんだと思った。

私は低学年の頃、何をしてもうまくいかず情緒が不安定で頑張ろうとすればするほど空回り、友達関係で悩んでいた時があった。周りからすれば、ちょっとしたおふざけの気持ちだったかもしれない。けれど、私にとってはとても重たく、気づいた時には、身体に異常が出ていた。

お母さんは、毎日学校から帰ってくると「今日はどうだった？」と聞いてくれる。今考えると、そのひと言があったから話すことができたのだと思う。私はお母さんの顔を見た瞬間、涙があふれ出し、家中ひびきわたるほど大泣きしたことを今でも覚えている。表面上では笑顔で、何もなかったかのように振る舞っていたつもりだったが、お母さんは私の様子がおかしいことに気づいていた。話すことで心に押し殺していたものが、一気にすーっとでていくのがわかった。

「ノートの字は汚かったし、筆箱の中も真っ黒。」とお母さんに言われ、まだ当時のノートがあったので、私は恐る恐る開いてみた。たしかに字は読めないほど汚く、ノートも落書きでいっぱい、消しごむは鉛筆でさしたあとがたくさん残っていて、私はハっとなった。

みんな弱い、だから支えあいながら生きていく。

「結良、大丈夫?」「何でも言ってね。」

今思い返すと、友達や先生、家族からのひと言が私にとって大きな救いだった。毎朝、「おはよう！今日はいい天気だね。いってらっしゃい。」「結良ちゃん、おかえり。」と地域の方が声をかけてくれる。私はあいさつをかわす。何気ないコミュニケーションがとても大事だということを気づかせてくれた。辛いことがあっても一人で抱え込まず、甘えよう、毎日話そう、そう思うようになった。そして、私自身も困っている人がいたら、声をかけよう、一歩踏み出す勇気を持とうと心に決めた。

「大‥丈夫ですか？」

小学六年生の春、私は勇気を出して声をかけた。見知らぬ人、正直ドキドキした。車いすが段差のあるところで動けなくなって困っているようだった。私は自転車を止め、おばあさんが乗る車いすを押した。すると、「ありがとう、助かったわ。」とおばあさんから笑顔とお礼の言葉をもらった。このことは、私の心の中から消えることはないだろう。私はおばあさんが見えなくなるまで、笑顔で見送った。その時の私の心はなんだか温かく、おばあさんも同じ気持ちだったらいいなと思った。

昭和から平成、令和に時代が変わっていく中、人が人に関心を持つことが少なくなり、繋がりも薄れているのではないだろうか。今の時代、サザエさんのような家族の繋がり、地域との繋がりが日本の古き良き文化として、これから先も大切にしていかなければならないと思った。

一人一人が人に関心を持ち、繋がり、寄りそうことで、ちょっとした変化でも気づく事ができれば、犯罪や非行の種を減らすことができるのではないかと思う。このような問題は算数のような公式があったり、正しい答えがすぐにでるわけでもない。次世代を担っていく私達がしっかりと向き合い、繋がりを大切に明るい輪を広げていくことができたら、その輪はいつかきっと、とても大きなものに成長するだろう。みんなで手を取り合える温かい明るい社会を築いていくために、今自分にできることを考え行動していこうと、私は決意した。私の第一歩が、未来へと繋がることを願って。

“社会を明るくする運動”
大阪府推進委員会マスコットキャラクター
アカルイーネ

コミュニケーションで防ぐ非行

堺市立白鷺小学校6年
大谷　優月さん

今は、お金を盗む事がとても悪い事だときちんと理解しています。だけど、僕は、パパのお財布からお金を盗んだ事があります。

僕がお金を盗んだ理由は、放課後に一緒に遊んでいる友達が、買い食いをしているのがとてもうらやましかったからです。

しかし、僕はお金を持っていませんでした。だから、パパのお財布から取ろうと思いました。

僕がお金を盗んだ時、三つの気持ちがありました。

一つ目は、お金が手に入り、友達と同じようにお菓子やジュースを買えるという嬉しい気持ちです。二つ目は、罪悪感です。もし、ママやパパにばれたらどうしようという不安な気持ちがありました。三つ目は、どうせおこづかいをもらえないから盗むしかないという気持ちです。

お金を盗む時、一瞬だけ迷いました。だけど、その時の僕は、嬉しい気持ちの方が勝ってしまい、罪悪感は見て見ぬふりをして、盗む事を実行しました。

しかし、盗んだ事はすぐにばれてしまいました。だけど、僕は、盗っていないやお金は落としたなど、たくさんのうそを重ねました。

それは、怒られるからばれたくないという、不安な気持ちがあったからです。本当は悪いことをしている自覚があったからです。

しかし、ママとパパには、うそだとすぐに見破られました。僕は、うそや言い訳を繰り返して、自分が何を言っているのかよく分からなくなりました。ばれた時は、怒られるくらいなら盗らなければ良かったとすごく後悔しました。だけど、もしばれなかったら、今も隠したまま知らないふりをしていたと思います。もしかしたら、お金が足りなくなって万引きをしていたかもしれません。お金を盗んだ事がすぐばれたのは、普段から、ママやパパときちんとコミュニケーションをとっていたからだと思います。だから、僕の様子がおかしいとすぐに気付いたのです。

僕は整理整頓がとても苦手なので、物の管理があまりできません。物の管理もできないのに、お金の管理ができるとは思えないと、ママとパパに言われていました。だから、おこづかいはもらえないと思い込んでお金を盗みました。普段の僕は、ママとパパにいろいろな事を話しています。それと同じように、おこづかいの事も相談すれば良かったです。そうすれば、お金を盗む事もなかったはずです。

この経験を通して、非行は、コミュニケーションに深く関わっていると思いました。僕の家族がもし、あまりコミュニケーションをとらない家族だったら、ママやパパは僕がお金を盗んだ事に気付かなかったかもしれません。

コミュニケーションは、非行を防止するためにとても大切だと思います。例えば、家族、先生、友達など、誰かに気軽に相談できる環境が必要です。そこで、僕達にもできる事を考えてみました。

家庭では、家族で話す時間を作るために、積極的にお手伝いをしたら良いと思います。学校では、職員室に相談に行くのは緊張するので、先生が教室にいてくれると声をかけやすくなると思います。他にも、放課後に先生と気軽に話をするお話し会などの時間を作ることができれば、相談しやすくなると思います。

僕が、お金を盗む事をやめられたのは、ママとパパが止めてくれたからです。コミュニケーションには、非行を防止する力があると思います。そのため、非行をなくすには、普段から、家族や先生、友達などと気軽にコミュニケーションをとれる環境作りが大切だと思います。

あいさつから始まる明るい街づくり

大阪市立中大江小学校6年
南野　遥希さん

ぼくが考える社会を明るくする運動は、「あいさつ」と「地域の人達の協力」だと思います。「あいさつ」をすると、朝から気持ちが明るくなります。毎朝学校に行く時、ぼくの家のマンションの管理人さんは、ぼくに大きな声で、「おはようございます。行ってらっしゃい。」と言ってくれます。最初は少しはずかしくて大きな声で挨拶することがあまり出来なかったけど、最近はぼくの方から大きな声で挨拶するようにしています。

そうすると、毎日マンションの清掃をして、きれいにしてくれていることに感謝の気持ちが生まれてきます。

また、地域の人達も小学生のぼく達に挨拶をしてくれる人が多いです。だから、ぼくの住んでいるこの地域は、街全体が明るくて、とても住みやすい場所だと僕は感じます。

このように、一人一人が意識して、積極的に挨拶をしていくことで、多くの人が明るい気持ちになり、元気が出てくるのではないかと思います。子供から大人まで、街全体の人達がそれを理解してくれるようになれば、その地域は明るくなり、少しずつかもしれませんが犯罪も減ってくるのではないでしょうか。

つまり、「あいさつ」から始まる明るい街づくりは、一人の力では実現させることは難しく、地域の人達の協力が必要不可欠なのです。

ぼくの小学校でも、先生や生徒達は大きな声で挨拶をします。朝から「おはよう」の挨拶で学校全体は明るくなり、ぼく自身も気持ちよく一日をスタートさせることが出来ていると思います。ぼくは、六年生になったので、低学年の見本となれるように、自分から大きな声で「あいさつ」をしていきたいと思います。なぜなら、ぼくも一年生のとき、六年生の人達を見習って「あいさつ」をし、とても頼もしい存在に感じていたからです。

明るい学校、明るい街になって、いじめや犯罪のない社会になってほしいなと強く願うので、ぼくは今出来ることを少しずつでもみんなに広めていけたらいいなと思います。

日々、大きな声で「あいさつ」をすることは、すぐにでも始められることだと思うので、地域全体で明るい社会を作っていくために、まずは「あいさつ」から始めてみませんか。街全体の人が住みやすいと感じる地域は、やはり犯罪が少ないです。ぼくの地域もそう感じる人が増えていけば、もっと明るい街になると思いますし、犯罪が少なくなれば安心して生活することができるようになります。

「あいさつ」と「地域の人達の協力」で、明るい街にしていくためにも、ぼくは、これからも大きな声で「あいさつ」をすることを日々続けていき、街全体、社会全体を明るく元気にすることを一つでも多く考えていけるような大人になりたいと思います。

中学生の部

行動を起こすこと

堺市立宮山台中学校2年
岩本　大朗さん

「嘘だろ・・・。」最初に出た言葉でした。

生徒会に所属している僕は、毎年夏休みに開催される「生徒会のつどい」に参加しました。その中でも「自分の人生にハッシュタグ（＃）をつけるなら」というテーマが一番印象に残っています。僕なら、「＃野球＃阪神＃楽しい」そんな風に思いました。

途中、「＃いじめ＃苦しい＃辛い」そんな人を見たらどうするか。何をしてあげるのか。そのような犯罪・いじめに対する内容になりました。僕は戸惑い、すぐには答えることができませんでした。

僕は、いじめは決して許しません。僕が小学三年生くらいのときに、同級生がいじめられているのを目撃しました。

ある日の昼休み、僕は教室で友達とトランプをしていました。突然、数人のクラスメイトが一人の男子生徒を取り囲んでいるのが目に入りました。彼らはその男子生徒をからかい、彼の筆箱を奪ってキャッチボールのように投げ合いをし、笑っていました。彼は怯えた様子で、何度もやめてと言っていましたが、いじめっ子たちは無視し続けていました。僕は、なにもしてあげられず、ただその光景を見つめるだけでした。

そのとき、傍にいた友人が「やめて」と言いました。最初は無視されましたが、強い口調で「これはいじめやねん！やめろや！」と繰り返しました。他の友人も「やめなよ」と声をかけました。そうすると、いじめっ子たちは少し驚き、嫌々ながらもからかうのをやめました。

いじめが一時的に止まった後、僕はすぐに担任の先生に報告しました。先生は真剣に話を聞いてくれ、その日のうちにいじめっ子たちを呼び出して注意をしました。また、いじめられていた男子生徒にも声をかけ、彼が安心して学校生活を送れるように努めてくださいました。いじめられていた彼に対して、僕は一人で抱え込まないように気を配りました。休み時間に一緒に過ごしたり、彼の話を聞いたりすることで、彼が少しでも安心できるようにしました。また、ほかのクラスメイトにも声をかけて、彼が孤立しないように協力を求めました。

あの時、声を出してあげていたらどうなっていたんだろうと、いつも考えてしまいます。

僕はこの体験を通じて、いじめ防止のためにできることがたくさんあることに気づきました。まず、傍観者にならない。自分には関係がないと思わずに止めてあげることが大切です。傍観者もいじめに加担していることは事実だと思います。傍観者で居続けていた場合も、後々、心に傷がついてしまいます。

次に相談する。友達でもいい、大人でもいい、身近な人・先生でもいいから、誰かに話す。そうすれば、心もスカッとし、気持ちも楽になると思います。

いじめを目撃したときには、冷静に状況を判断し、勇気を持って介入することが重要だと思います。また、先生や大人に報告し、いじめられている人を助けることでいじめの再発を防ぐことができると考えます。僕の実体験を通じて、いじめを見過ごさず、行動を起こすことの大切さを強く感じました。

いいクラス、いい学年とは、みんなが仲良く一人ひとりが大切に思われていて、安心できることだと思います。

それを目指すために、いじめを許さない、させない、人が嫌な気持ちになるような発言・行動・態度を取らない。それはクラスに限らず、社会全体にも関係することだと思います。

SNS などでも誹謗中傷やトラブルといった問題が沢山あります。その中でも明るい、優しいハッシュタグを増やすために気をつけることが大切です。そして、一人ひとりがこういった問題に向き合い、考えることが社会を明るくすることにつながると強く思いました。一人の小さな行動が、社会全体の大きな変化につながると信じて、積極的に取り組もうと思います。

見守りたいから見守り隊

堺市立金岡南中学校2年
篠本　悠さん

私は六年間見守り隊の方々にお世話になりました。毎日早朝から、校区内の事故が起こりやすそうな場所に立って交通整理を行ってくださっていました。毎朝、大きな声であいさつしてくれる見守り隊の方々のおかげで、私は暖かい気持ちで登校することができていました。そこで私は、見守り隊の活動が犯罪防止にどのように関わっていたのか考えてみました。

まず、見守り隊は地域の人たちのボランティアで成り立っています。犯罪に巻き込まれやすい小・中学生の私たちの安全を守る活動をしてくださっています。そして、事故の起こりやすそうな場所に立っているだけではなく、一人で帰っている子どもを家まで送ることもしてくださっていました。一人ひとりの子どもを最後まで安全に送り届ける姿が、とてもかっこよかったのを今でも覚えています。

また、私が町内の登校班の班長をしていたときに、低学年が歩くのにおくれていたら、手を引っ張って私の班の列まで連れてきてくれました。当時は低学年の人数が多かったので、私も全員を見ることができていませんでした。振り返ると、見守り隊の方の助けがあったおかげで、班のみんなが事故に遭わずに安全に登校できていた。今思えば、すごく助かっていたのだなと感じ、きっと毎日見守り隊を続けていればしんどいだろうに、それでもそれを感じさせず、笑顔であいさつをしてくださることが、当たり前のことではなく、ありがたいことだったのだなと思います。

見守り隊の方々は、私たちの安全を守ること以外にも担っている役割があります。それは人の心に寄り添い、支えることです。私が小学生の頃、友だちとのいざこざの末、けんかをし、下校の際にうかない顔をしていたときに、学校でなにかあったのか、しんどいのかと、いつも通学路に立っている見守り隊のおじさんが声をかけてくださいました。

そして私は、今まであふれていた不満をおじさんにぽつぽ

つと話しました。おじさんは最後まで黙ってきいてくださいました。私はアドバイスがほしかったのではなく、ただ誰かに話したかっただけだったので、話し終えたあとは、とても心が落ち着きました。心の状態が悪いことに気付いてきいてもらうことで、私のように見守り隊の方に救われる人がきっといるはずです。例えば、罪を犯してしまう人。この人たちは、悪いことかどうかを判断することができない心理状態にあると私は思います。そんな心を救い犯罪を止めることができるのが見守り隊の方々であり、地域の輪をこえたみんなの心の支えになっているのだと私は考えます。

私が見守り隊の方々から実際に話を伺ったことで、心に残っていることがあります。幼かったころの私は、見守り隊の方々がなぜそこまでして私たちを守ってくれているのかが分かりませんでした。そこで、実際に先述したおじさんにきいてみました。すると、おじさんは「見守りたいから見守り隊。毎日の君たちの大きな挨拶にすごく元気をもらっているんだ。」と言っていました。本当は私たちが感謝するべきなのに元気を与えられていたことがすごくうれしかったです。

本当に見守り隊の方は地域のヒーローであり、みんなの心の支えだと思います。私もこの方々のように中学校で困っている下級生や先生の手伝いを率先して行い、かっこいいヒーローになりたいです。

「身近な犯罪を防ぐために」

東大阪市立縄手北中学校2年
西田　実夢さん

私は放課後や休日によくスマホを使います。母はスマホを使い始める前に、いくつかルールを決めてくれました。その内容は、「何か選択しなければならない場合は、自分で勝手に決めるのではなく、まずは大人の人に確認してもらう。」、「個人情報は決して人に教えてはならない。」などです。このルールは私の命を守るために考えたそうです。まだ私はこの頃、スマホ・インターネットの怖さをよく知りませんでした。一体何があって、私はその怖さを知ることになったのでしょうか・・・今からその理由をお話しします。

ある日、私はいつもと同じようにスマホを触っていました。そして調べたいことがあったので、サファリという検索アプリを使おうとしました。すると、赤と黒の画面にパッと切り替わったのです。しかも、その画面には大きく「ウイルスに感染しました。今すぐに解除しないと個人情報が流出します。」と書いてあったのです。それを見た瞬間、とても怖くなって、どうすれば良いか分からず、すごく焦ってしまい、思わずその画面にあったボタンを押してしまいそうになりました。でもその時、母に言われた言葉を思い出したのです。そして、すぐに母に相談しました。すると、それは警告詐欺なのでクリックしてはいけないと分かり、電源を切り、事なきを得ました。

このように私たちのすぐ身近に犯罪の危険は潜んでいます。最近では、SNS を使った中学生によるドラッグの売買なども流行していると聞きます。こういった犯罪に巻き込まれないようにするためには、テレビの中の悪い出来事を、自分には関係のないことだと思わず、常日頃から、もし自分に同じようなことが起こったとき、どうしたら良いか考えておく必要があると思います。そして、まずは身近な家族に相談することが大切だと考えます。そのためには、家族とのコミュニケーションを大事にし、相談しやすい環境を作っておく必要があると思います。私たち、中学生は思春期真っただ中で、なかなか親に素直になれないところがありますが、一人で考えて間違った選択をしてしまい、犯罪に巻き込まれてしまうかもしれません。だから、素直に迷わず家族に相談することで犯罪に巻き込まれる人たちが減るのではないでしょうか。

また、地域の人たちとの繋がりが年々なくなってきているのが、犯罪を増やす原因になっているということも聞きました。私の祖父は毎朝、家の前を通る小中学校の生徒や先生たちにあいさつをしています。時々、誰と話しているんだろうと思ったら、私の友達だったりしてすごくびっくりしますし、少し恥ずかしいなと思ってしまいます。でも、祖父が声をかけることによって、地域の人たちとの繋がりができ、しばらく学校を休んでいるのか、顔を見ない子のことを心配しているのを見ると、良いことだなぁと感じます。このことから、地域の人たちみんなが少しずつ声をかけ、繋がっていくことによって、自然と地域の見守りができていくのではないかと思いました。

これまで述べたように、身近な犯罪を防ぐために、「相談しやすい環境を作る。」「地域の人たちとの繋がりを大切にする」というのを意識していけばいいと思います。

親と子

堺市立晴美台中学校3年
郡山　心良さん

「犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする運動。」

「次代を担う小・中学生が日常で感じたこと、考えたことをもとに作文を書き、それを通じて運動に対する理解を深めてもらう。」

私はこの運動の募集要項を初めて読んだとき、「理解が深まるだけで、果たして明るい社会が築けるのだろうか。」と疑問を抱いた。作文を書くだけでは社会を「明るく」するのに至らないのではないだろうか。理解を深めたその先に一体何があるのだろうか。

私はこの運動を否定したいわけではない。犯罪や非行がなくなり、明るい社会が築かれるのはとても良いことだと思う。ただ、この運動に参加している小、中学生は、そもそも社会を「暗く」する要因にはならないのではないかと思うが・・・。

非行を防ぐにはどうすればいいか。そんなことは育ってきた環境や家庭内の様子、周囲の人間関係など一人ひとり異なるので、きっぱりと「これだ」と言ってしまうのははばかられる。しかし、私は、まずは親が自分の子供をしっかり愛することと、それと同時に適切な距離感を保つことが大切だと考える。

子供の私がこんなことを言っては、腹が立つかもしれないが、日々のニュースを見ていると、子供ながらにも「愛情をもって育てられないのなら産むべきではない。」と思わされるこ

とが度々ある。愛情を知らない子供が非行に走るケースは多いそうだ。「トー横」や「グリ下」など、連日メディアで取り上げられている言葉であるが、私とそれほど年齢が変わらない少年少女が、様々な違法行為を行い、果ては違法薬物などにも手を出してしまう事例も少なくない。彼らは果たして、自ら望んで、あの場所に身を寄せているのだろうか。家庭や学校などに自分の居場所がないから、同じ環境で生きている者同士、仲間意識が芽生え、そこが唯一の居場所だと錯覚してしまっているのではないだろうか。

だからまずは、子供を産んだのであれば、愛情をもって大切に育てるべきだと思う。自分の子供が悪いことをしてしまったらきちんと叱り、いいことをしたら、それを認めて褒める。子供にとって親は、誰よりも一番頼れる存在であるべきだと考える。

そしてもう一つ、適切な距離感について。愛情をもって接するのは大切なことであるが、それがエスカレートすると、逆に子供にストレスを与えてしまう場合もある。当然、親子は親しい関係であり、血はつながっているが、別々の人間であるということに違いはない。

だから、愛情をもって接しながらも適切な距離感を保ち、一人の人間として尊重することが非行防止の第一歩になると思う。ただ、これはとても難しいことだとも感じる。

しかし、私が将来子供を産み、母になるときにはそれくらいの覚悟と責任感をもって育てたいと思う。そうすれば、自分の子供が非行に走ることはないだろうし、社会全体がそのようになれば、非行は減るはずだ。

私はこの作文を書いて、本運動についての理解が少しは深まった。しかしそれは、所詮作文を書いた者だけに他ならない。一人ひとりの理解や、責任感、覚悟に基づく行動で社会が変わるとしても、全員がそれを理解したうえで、それぞれが行動に移すのと、一人だけで理解して行動するのでは、社会全体に与える効果は大きく異なる。だからこそ、この社会を明るくする作文コンテストで集まった作文を、できるだけたくさんの人に読んでもらうべきだと思う。

私自身、この作文を書くまで社会を明るくする運動の存在自体知らなかった。これまで集まった作文をどうしていたのかはわからないが、本当に社会を明るくしたい、犯罪や非行をなくしたいと願うのであれば、もと広くこの運動が認知される努力をするべきだと思う。

繰り返すが、私はこの運動を否定したいわけではない。今回、作文を書いたことで、文章に起こすと理解が断然深まるということを体感した。また、そのうえで自分にできることは何かと考えるきっかけにもなった。

だが、先述の通り、私一人で理解して行動に移しても、社会を変えることは難しい。だから、大勢の人にこの運動を知ってもらい、作文を読んでもらう。そして、大勢の人が各々行動に移す。そうすれば、確実に社会は今よりも明るくなるはずだ。

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテストには、大阪府内から8,687人の小学生と 17,271人の中学生が、大阪府推進委員会に作品を寄せてくれました。

その中から小学生の3作品と中学生の4作品を「ひまわり奨励賞」として表彰いたしました。

参加されたすべての小学生・中学生ほか関係各位の皆さまに心から御礼申し上げます。

“社会を明るくする運動”大阪府推進委員会事務局

“社会を明るくする運動”大阪府推進委員会
マスコットキャラクター　アカルイーネ

明るく見守るイメージでヒマワリとハートをあしらい、芽生えた双葉で立ち直りを願って描かれました。

犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ

第74回 社会を明るくする運動

7月は“社会を明るくする運動”
強調月間・再犯防止啓発月間です。

社明 しゃめい　検索